

児童英語教育における手書き文字指導 — 手書き文字の実態調査より —

鹿住尚子

1 はじめに

1.1 問題の所在

英単語のスペリングで苦勞している児童が少なからず存在しているにもかかわらず、「正しく書けないのは個人の努力不足」「練習をすれば書けるようになる」という立場からの指導が多く見られるのは問題である。小学校 6 年間で 1000 字以上の漢字を学習する児童にとって、アルファベットの文字数は大文字と小文字あわせてもわずか 52 文字である上、画数も漢字に比べると圧倒的に少ないため、習得は容易だと思われるのかもしれない。しかし、入門期に適切な「英語の手書き文字の指導」をすることが、その後の英語学習において重要な役割を果たすことを改めて確認したい(手島 2019)。

従来小学校では、3 年生の国語においてローマ字を学習し、そこで初めてアルファベットの文字指導が行われている。さらに、2020 年度より 5 年生から外国語(英語)が教科化され、指導領域にあらたに「書くこと」が加わった。また、市中には民間の「英語教室」も数多く存在し、それぞれが自由に選ぶ教材を利用して文字指導を行っている。

国語、英語、さらに民間教育において、それぞれ異なる教科書や教材を利用して文字指導を行い、文字指導のモデルとなるフォントも異なっているという現状は、英語学習入門期の学習者にとって望ましくない環境と言える。そこで、児童にとって負担が少なく、かつ効果的な手書き文字指導を構築する必要があると考える。

1.2 研究の目的

上記の問題認識から、本研究における研究の目的は以下の 3 点となる。

- (1) 小学校外国語・外国語活動における文字指導の実態を明らかにする。
- (2) 小学校英語検定教科書における文字指導と使用フォントの実態を明らかにする。
- (3) 児童・生徒による手書き文字の実態を明らかにする。

1.3 研究の方法

上述の「研究の目的」を達成するため、本研究では以下の研究方法をとることとする。

- (1) 学習指導用要領における「書くこと」の取り扱いを精査する。
- (2) 文字指導と使用フォントの実態を見るため、7社の検定教科書を比較検討する。
- (3) 英語教室に在籍している児童・生徒がアルファベットの小文字を書く様子を録画し、手書き文字の実態を調査する。

なお、本研究は英語学習入門期における児童・生徒が英語学習を行う中で自然と習得したアルファベットの書き順に着目し、特に英語学習者において書き間違えの多い**b**と**d**をどのように書いているかの実態調査が主たる目的である。本来、手書き文字の指導実践を行い、学習者の手書き文字に変化がみられるのか、**b**と**d**の書き間違えが減っていくのかどうか検証するべきなのだが、本研究ではその前段階の予備的調査という位置づけになることをあらかじめお断りしておく。

1.4 用語の定義

具体的な検討に入る前に、まず本稿で使用する用語の定義について整理しておくことにする。

(1) 「文字」とは

『大辞林（第四版）』では、「言語の伝達手段の一つとして使われる符号。点・線などを組み合わせたもの。漢字などの表意文字、ローマ字・仮名などの表音文字に二大別される。文字の起源は事物をかたどった絵にあり、象形文字・表意文字・表音文字へと進んだと考えられる。」と定義されている。本稿も「文字」の概念規定をこの定義に準じて使用する。

(2) 「手書き文字 (handwriting)」とは

「手書き文字 (handwriting)」とは、辞書的には「印刷などでなく、(その人が) 自分で書いた文字」となるだろうが、本稿ではアルファベットを **Sassoon** 系のフォント¹で印字したもの、および、それをお手本にして、学習者が自分で書いた文字を「手書き文字」と呼ぶことにする。

1.5 先行研究

まず、「文字」に関する包括的な研究は町田（2009）に詳しい。同書によれば、現在、世界の言語数は6千とも7千とも言われているが、世界で使用されている文字の種類はそ

¹ 「**Sassoon** 系のフォント」とは、**Rosemary Sassoon** が **Adrian Williams** と共同で作成した初学者向けのアルファベットの手書き用フォントシリーズ、および、そこから発展したユニバーサルデザイン系フォント全般を想定している。

の言語数と比べてはるかに少なく、50 種類前後とされる。それらの文字は大きくわけて 4 つの系統に分類することができ、英語はギリシア文字の系譜のラテン文字を使用した言語で、ギリシア文字の最初の 2 文字からとったアルファベット (alphabet) という名称は厳密にはギリシア文字の直系子孫たちの総称として使用されているという。

次に文字指導についてだが、手島 (2019) は、従来文字指導で使用されてきた活字体の小文字について、以下のような問題点を挙げている。①直立している。②直線と正円の組み合わせによってできていて、定規とコンパスを使って書くかのような字形は自然な手指の動きに反している。③2 画以上の文字が多く、‘a’を書くだけでも‘c’と‘l’の間に鉛筆の芯を一度離す必要があり、バランスよく書くのに時間がかかる。④鏡像関係 (例えば b と d) にある文字が多いため、認識が難しく学習者が混乱する。⑤文字に動きがなく、図形的である、の 5 点である。

これらの問題点を解決するためには、英語学習者が目にするフォントへの配慮が不可欠で、かつ一画で書けるものはそのように指導をすることがアルファベットの初期の書字指導には大切なことであると考え。松井 (2020) は入門期の指導の原則として、「見る文字と書く文字のギャップを極力減らす」ことが大切だと述べている。

アルファベットに決まった筆順というものはないが、字形を作りやすく、「続け字」も書きやすく、急いで書いた時でも他の文字と見間違えにくい筆順 (書き順) を提示することは、のちの英語学習においても重要な影響を持つと考える。

大文字と比べて小文字は文字が単に小さくなるだけでなく、単純化のため弁別特徴が少なくなる一方で、文字の高さや 4 線の中での位置などに意味が出てくるため、小文字の学習に困難を感じる児童は少なくない (アレン玉井 2019)。文字指導は小中連携の鍵であり、英語を体系的、系統的に教えていく上で不可欠である。アメリカで文字を学習している子どもの中にも、b でも f でも i でもすべて下から上に向かって書く子どもがたくさんいる。しかし下から上に向かって書くのでは文字を早く書けないので、高学年になってノートをとるときなどに不都合が生じる。アルファベットのブロック体に、決まった書き順や正しい書き順というものはないが、アメリカの教員もアルファベットを教える際に、書き順を口に出しながら教えているという (田中 2017)。

大文字、小文字の指導順序については様々な意見が見受けられる。英米では小文字の方が生活の中での使用頻度が圧倒的に高いため、小文字から指導することが一般的である。英国 National Handwriting Association では、手の動き (筆法) 順に文字をグループ化し、同じ筆法のもの (例えば、l, i, u, t, y, j という上から下への動きのものを l team としている) を一緒にすることで、最初の ‘lead’ 文字が他の文字を書く助けとなっている。また英国で生まれた Jolly Phonics では、使用頻度の高い小文字 (s, a, t, p, i, n...) から学習が進められていく。しかし、手島 (2019) は、日本の英語教育においては大文字から学習すること

を提案している。その理由として、日本の生徒が普段の生活の中で目に触れているアルファベットは大文字が圧倒的に多いことと、大文字はすべて4線に対して同じ高さで書くため学習のしやすさを挙げている。アレン玉井（2019）も同様に字形という観点から、大文字から始めて小文字に移る順序のほうが児童にとって書きやすいとしている。大文字から指導をする場合でも通常のABCの順番で教える方法と、筆法の似た文字のグループごとに練習する方法などがある。田中（2017）は、大文字、小文字をAaと隣あわせで書かせることを提案している。

2 小学校英語における文字指導

2.1 新学習指導要領の外国語・外国語活動における「書くこと」の取り扱い

小学校では、平成23年度より高学年において外国語活動が導入され、中学生の外国語教育に対する積極性の向上につながった一方、音声中心で学んだため、中学校の段階で音声から文字への学習に円滑に接続できないなどの課題が指摘されている。そこで平成29年度告示の改訂では、外国語活動を小学校中学年から導入し、「聞くこと」、「話すこと」を中心とした活動を通じて外国語に慣れ親しみ、外国語学習への動機づけを高めた上で、高学年から発達の段階に応じて文字を「読むこと」と「書くこと」を加えて総合的・系統的に扱う教科学習とし、中学校への接続を図ることを重視するようになった。

中学年の外国語活動の指導項目は(1) 聞くこと、(2) 話すこと [やり取り]、(3) 話すこと [発表] の3領域のみとなっている。文字指導の扱いは「(1) 聞くこと」の目標で「文字の読み方が発音されるのを聞いた際に、どの文字であるかが分かるようにする。」となっている。「この目標における『読み方』とは、音ではなく、文字の名称の読み方を指していることを留意する必要がある。」との記述から、中学年ではフォニックス指導は行わず、「身の回りに英語の文字がたくさんあることに気付かせるなど、楽しみながら文字に慣れ親しんでいく」とあくまでも文字への興味関心を喚起するのみで、書くことの指導は原則行われないことがわかる。

高学年の英語の指導領域は、前述の3領域に「読むこと」、「書くこと」が加わり、それぞれの領域別に目標が設定されている。(5) 書くことの目標として「大文字、小文字を活字体で書くことができるようにする。また、語順を意識しながら音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を書き写すことができるようにする。」と記されている。

「文字を書く指導に当たり、大文字、小文字を活字体で書かせる際には、『a, c, e』、『f, l』、『g, y』など文字の高さの違いを意識させたり、『p, q』、『b, d』など紛らわしい形などを意識させたりするなど、指導の工夫をする必要がある。…文字の形の特長を捉えて指導する

など工夫することが大切…」との記述からも、文字指導を重視していることが伺える。

また、「知識及び技能」の「イ 文字及び符号 (7) 活字体の大文字、小文字」では、文字の形や長さなどには様々なものがあり、他の文字と区別して認識できるように丁寧に書いたり、適度な速さで書いたりすることを意識させることが重要であるとしている。また、文字の書き順については、書きやすさと読みやすさの点から標準的な書き順を扱い、最終的には児童が何も見ることなく自分の力で活字体の大文字、小文字を書くことができるようにすることが目標とされている。しかし、「書くこと」は個人差が大きく出やすい領域であるため、児童の実態に応じて一度に取り扱う文字の数や種類に配慮する必要がある。授業においては十分な時間を確保することが重要である。また、「文字を指導する際には、小学校第3学年の国語科において日本語のローマ字表記が指導されていることを踏まえ、指導の工夫をすることが必要である。」とあり、中学年の外国語活動では書くことの指導がないにもかかわらず、国語科ではローマ字の学習に伴いアルファベット指導が行われているというのが現状である。

2.2 7社の小学校英語検定教科書による文字指導および本文書体の比較

小学校外国語科の英語の検定教科書は令和2年度より東京書籍、開隆堂、学校図書、三省堂、教育出版、光村図書、啓林館の7社から出版されている。以下に一覧を示す。



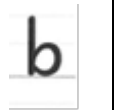







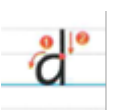
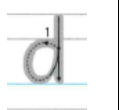










表1 小学校外国語科（英語）検定教科書一覧

	出版社	略記	教科書名
1	東京書籍	東書	NEW HORIZON Elementary English Course 5
			NEW HORIZON Elementary English Course 6
2	開隆堂	—	Junior Sunshine 5
			Junior Sunshine 6
3	学校図書	学図	JUNIOR TOTAL ENGLISH 1
			JUNIOR TOTAL ENGLISH 2
4	三省堂	—	CROWIN Jr. 5
			CROWIN Jr. 6
5	教育出版	教出	ONE WORLD Smiles 5
			ONE WORLD Smiles 6
6	光村図書	光村	Here We Go! 5
			Here We Go! 6

7	啓林館	—	Blue Sky elementary 5
			Blue Sky elementary 6

5年生で初めて文字指導が入るため、今回は5年生対象の各社の編集趣意書および教科書でアルファベットの書き順、使用されている書体、4線についての留意点、アルファベットの導入順の比較を行った。本研究では、児童が混同しやすい**b**と**d**について調査していくが、表2では、**b**、**d**に加えて、画数が増えると字形を崩しやすくなる可能性のある**M**の大文字、小文字の4文字の書き順表記をまとめた。

表2 検定教科書7社の書き順表記比較

文字	東書	開隆堂	学図	三省堂	教出	光村	啓林館
b							
d							
M							
m							

7社すべて書体は各社独自のユニバーサルデザイン（以降UD）フォントを開発、または採用をし、書体の特長として小文字の**b**と**d**、**p**と**q**などの丸い部分を正円ではなく、楕円で表すことで、児童がそのまま真似をして書ける手書き文字に近いフォントが使用されていた。4線の基線の色については、1社をのぞいて色覚特性に判別しやすい青色にしてある。書き順に着目したところ、表2の4文字だけでも書き順の指導に様々な違いがあることがわかった。また、同じ書き方によっても、1画で表す場合と、2画で表す場合には児童の受け取り方に違いがあるのではないと思われる。

次に、各社の書き順および標記の特徴を整理し表3として示しておく。

表3 書き順および表記の特徴

	書き順および表記の特徴
東書	一筆書き中心。バリエーションも記載。
開隆堂	画数が多い（M、W が4画扱い）。
学図	書き順の記載なし。
三省堂	なぞり書きの練習はなく、書き写す練習。書き順の記載なし。
教出	一筆書きだが、2画で示されている。
光村	一筆書きが中心。
啓林館	一筆で書く部分も複数の画数として表記。

筆者が注目したのは学校図書と三省堂の教科書である。この両社の教科書には書き順の記載がない。時間の制約もあり、三省堂の教科書のみであるが、時代をさかのぼってみると、昭和53年に発行された The New Crown English Series 1 では、Lesson 1「英語の文字」の単元でアルファベットの大文字・小文字の紹介の他に、「英語の文字の書き方」として筆順が紹介されていた。しかし、昭和59年以降の同教科書においては、筆順の部分のみが削除されている。初学者にとって、書きやすい筆順を提示することはその後の学習を容易にすると考えられるので、なぜ削除されたのか疑問である。

次に各出版社のアルファベットの書字指導（書き方指導）の順序を一覧にして示す。

表4 アルファベット書字指導の順番

	アルファベットの書字指導の順番
東書	①大文字→②小文字→③形の似ている文字→④手の動かし方が同じ文字
開隆堂	①大文字→②大文字の形に着目→③小文字→④小文字の高さに着目
学図	①大文字小文字をセットで同時学習→②小文字の高さに着目→③単語のなぞり
三省堂	①代名詞 he / She のなぞり→②文のなぞり
教出	①大文字→②小文字→③小文字の高さに着目 ²
光村	①大文字→②小文字→③大文字小文字をセットで学習
啓林館	①大文字と小文字の形が同じもの→②高さでグループ化し大文字・小文字を同時学習

大文字のあとに小文字を学ぶという順番が多いが、独自のルールで導入をしている教科

²「小文字の高さ」とは、初学者用の英語ノートに印刷されている4線の上に文字を書いた際、一番上の線まで縦の棒が届く文字（たとえばhなど）と上から2番目の線まで届く文字（たとえばoなど）の「高さ」に注目させているということである。

書もあるところに各教科書の著者の意図、あるいは、指導観が垣間見られる。

また、著者の意図という観点では、英語学習者には、アルファベットの文字学習を行う際にその由来や世界には様々な文字があることにもぜひ触れておきたい。世界には英語以外にも様々な文字が存在するというのを、7社中3社が巻頭に世界の挨拶や文字を掲載することで示していた。たとえば、2002年に刊行されたNew Crown 1の検定教科書では、巻頭に65か国の「世界の言語」を紹介し、巻末に英語を含む6か国の印刷物の「文字」を掲載している。

3 児童・生徒による手書き文字の実態

自教室に在籍している小学1年生～中学2年生全130名を対象に、2020年8月アルファベットの小文字26文字をどのように書いているのかビデオを撮ってもらい（図1）、単語を書く際に間違いやすい小文字のbとdをどのように書いているのかを調査した。

アルファベットの文字指導は、小1の児童は就学前のクラスでジョリーフォニックスの手法を利用して小文字の指導を行っていたが、4月以降は手書き文字指導を特に行っていない。小2以上の児童・生徒に対しては、アルファベットは書けるものとして、筆順や筆法に関して授業の中で書字指導を行うことはなかった。保護者より書き順の手本を求められた際には、フリーサイトよりダウンロード可能なアルファベットシート（図2）を配布し、各自そのシートを元に市販の8段の4線ノートに練習するという方法をとっていた。

図1 録画の様子

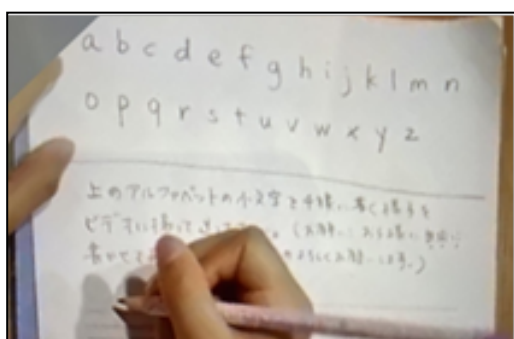
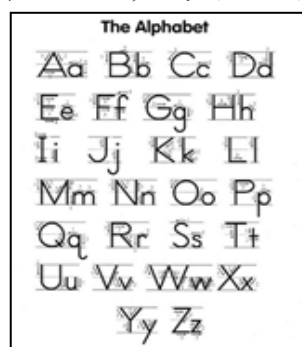


図2 アルファベットシート











アルファベットの文字指導が英語教室のみの小1、小2、学校の国語でローマ字を学習した小3、小4、英語を教科として学習している小5以上のそれぞれの児童・生徒がアルファベットの文字を書いているのかという実態の分析をここでは行う。

手書き文字の録画の際の文字見本は筆者の手書き文字で行った。これは、利用するフォ

ントによっては、そのフォントの形を忠実に再現することに児童の意識が向いてしまうのではないかという懸念からである。極力児童・生徒自身の普段の書く文字の分析を行うことを目的としたが、アルファベットの習得がまだ不十分な低学年の児童にとっては、筆者の手書き文字を見ながら書き写す様子が伺えた。

以下の表5では、bとdの文字の筆順をそれぞれ4パターンに分け、それぞれのパターンで書く人数の割合を示している。

表5 学年別書き順分布表

学年(人数)		小1(15)	小2(17)	小3(16)	小4(12)	小5(17)	小6(18)	中1(17)	中2(18)
b1		8 (53%)	7 (41%)	4 (25%)	6 (50%)	6 (35%)	3 (17%)	8 (47%)	12 (67%)
b2		7 (47%)	8 (47%)	9 (56%)	6 (50%)	9 (53%)	8 (44%)	8 (47%)	6 (33%)
b3		0 (0%)	2 (12%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	1 (6%)	0 (0%)
b4		0 (0%)	0 (0%)	3 (19%)	0 (0%)	2 (12%)	7 (39%)	0 (0%)	0 (0%)
d1		6 (40%)	6 (35%)	4 (25%)	4 (33%)	5 (29%)	2 (11%)	5 (29%)	6 (33%)
d2		8 (53%)	7 (41%)	5 (31%)	4 (33%)	6 (35%)	7 (39%)	4 (24%)	3 (17%)
d3		1 (7%)	2 (12%)	2 (13%)	2 (17%)	1 (6%)	0 (0%)	5 (29%)	5 (28%)
d4		0 (0%)	2 (12%)	5 (31%)	2 (17%)	5 (29%)	9 (50%)	3 (18%)	4 (22%)

* 上段の数字は人数を示し、下段はその割合を示している。

図3 小文字 b の筆順別の割合

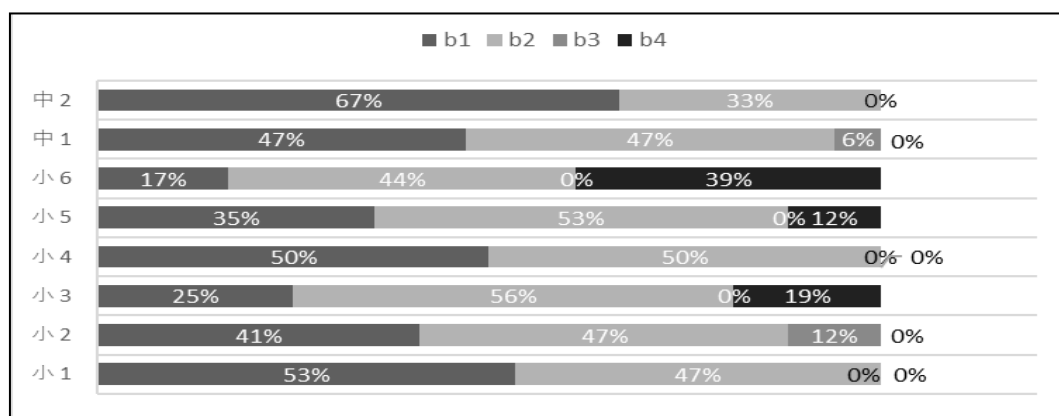
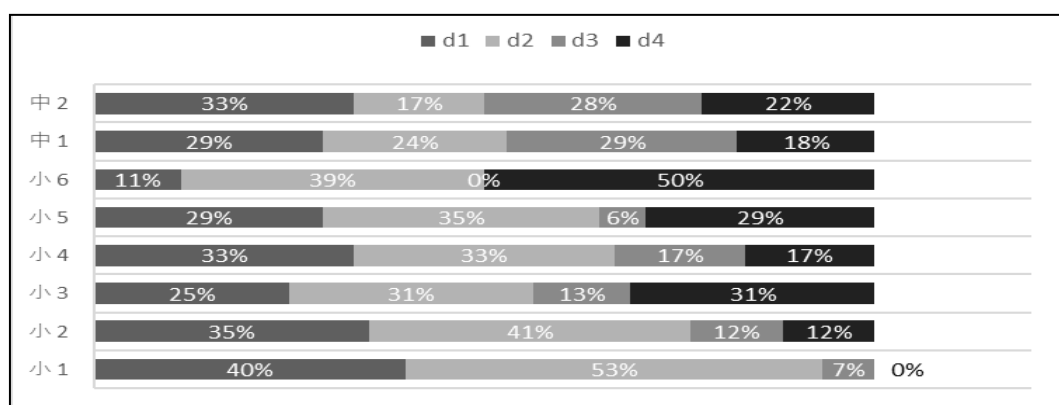


図4 小文字 d の筆順別の割合



今回の調査の結果、b は各教科書で示されている縦棒から書き始める筆順で1画 (b1) ないし2画 (b2) で書く児童・生徒がほとんどの割合を占めていた。しかし、d は教科書で示されている楕円から書き始める d3 や d4 の筆順ではなく、b と同様に縦棒から書き始める児童・生徒の割合が多く、一番多い学年で93% (小1)、少ない学年でも50% (小6、中2) を占めていた。また、書くスピードを比較した場合、やはり2画で書く児童の方が文字を書く時に一筆の場合と比較して丁寧に書こうとすることに集中して時間がかかる傾向が見られた。130名中、3名はbとdを逆に書いていた。3名ともbとdを同じように縦棒から書き始めていたことが共通点として認められた。

4 考察

2020 年度より英語が小学 5 年生より教科化され、文字指導が中学校から小学校へと降りてきた。そこで、本研究では学習指導要領での文字指導に当たる部分の取り扱いを明らかにし、現行教科書 7 社のアルファベットの筆順や導入方法などの比較を行った。

初めての文字指導で大切なことは、児童が目にする文字（フォント）と実際に手書きする文字のギャップを極力減らすことであり（松井 2020）、アルファベット文字導入の箇所のみならず、教科書本文で使用するフォントもすべて手書き文字フォントであることが望ましい。その点においては、7 社中 6 社は本文中の単語や例文も手書き文字フォントが使用されており、文字学習入門期の児童に配慮がされていることがわかった。さらに、東京書籍の New Horizon Elementary English Course 5 では、アルファベットの筆順のバリエーション、書くときのポイント、形の似ている文字を並べて比較、英国の NHA と同様に手の動かし方で小文字をグループ化し紹介するなど、手書き文字指導に重点をおいていることが教科書の構成から感じられた。さらに、4 線の中の第 2 線と第 3 線（基線）の間をグレーにし色覚的にわかりやすくすることは、字形をとらえるのが苦手な児童の文字の習得も支援しているといえる。

児童・生徒の手書き文字の実態調査では、b と d の筆順に着目し分析を行ったが、d を b と同じように縦棒から始める児童・生徒の割合が多いことが特徴的であった。これは、漢字は基本的に縦から書くことが要因になっているのではないかと推測される。b と d の文字は英語学習者にとって混同しやすい文字だが、同じように縦棒から書くことで区別をつけにくくなっていることも一因ではないかと考えられる。その為にも、文字導入時に英語の文字を書くときは、「左から右、上から下」という原則を伝え、b は縦棒から、d は楕円から書くことを意識づけすることが重要ではないだろうか。書くスピードを比較すると 2 画で書く場合は一度ペン先を上げる必要があるため、どうしても一筆と比較するとより多くの時間を要してしまう。英語学習が進むと書く文章量も増え、早く書くということも必要な技能である。その為、最初の文字指導の時にできるだけ表 5 の b1、d3 のように、一筆で書ける文字は一筆で書く指導を行うことが望ましいのではないかと考える。

しかし、指導者すべてがアルファベットの文字には漢字のような決められた「筆順」というものが存在しないということを認識していない場合、問題が生じる可能性がある。たとえば、英語学校などで一筆書きを習得した生徒が、その後に学校で使用されている教科書に記載されているアルファベットの筆順が、一筆書きで書けるものも 2 画で示されていた場合に、指導者が書き方の違いを指摘し、訂正する可能性が懸念事項として挙げられる。そのためにも、今後入門期における文字指導の留意点について広く周知されることを期待したい。

また、手書き文字指導には、手書き文字に近いフォントを教材制作の際に使用することが非常に重要である。手書き文字に一番近いフォントには、有料のものでは株式会社モリサワと東京書籍が共同開発した「JKHandwriting」というフォントがあるが、無料利用可能なものを調べたところ、正進社のホームページよりダウンロード可能な「エイゴラボ FONTS」がみつかった。アルファベット文字を習得する過程で英語学習者が目にするフォントにはこのようなフォントを使うことが必須である。

5 おわりに

4.1 結論

本稿では、国語、英語、さらに民間教育において、それぞれ異なる教科書や教材を利用して文字指導を行い、文字指導のモデルとなるフォントも異なっているという現状は入門期の英語学習者にとって望ましくない環境であり、児童にとって負担が少なく、かつ効果的な手書き文字指導を構築する必要があるとの問題意識に立って、まず、(1) 小学校外国語・外国語活動における文字指導の実際を明らかにし、次に、(2) 小学校英語検定教科書における文字指導と使用フォントの実態を明らかにし、最後に、(3) 児童・生徒による手書き文字の実態を明らかにした。

結論として、入門期における文字指導の重要性と留意点について広く周知すべきであり、教科書や教材では UD フォントを使用し、それをお手本として手書き文字指導を行う必要がある。

4.2 今後の課題

本研究では、自教室に在籍している児童・生徒の手書き文字の実態を明らかにし、今後の手書き文字指導における留意点についてまとめた。今後は手書き文字指導を実践していく中で、英語学習者の **b** と **d** の文字の書き間違いを減らすことが可能であるかをさらに観察し分析を進める必要がある。

参考文献

- アレン玉井光江 (2019) 『小学校英語の文字指導 リタラシー指導の理論と実践』, 東京書籍.
- 田中真紀子 (2017) 『小学生に英語の読み書きをどう教えたらいいか』, 研究社.

手島良（2019）『これからの英語の文字指導』，研究社。
町田和彦（2011）『世界の文字を楽しむ小事典』，大修館書店。
松村明編（2019）『大辞林 第四版』，三省堂。
文部科学省（2018）「小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 外国語活動・外国語編」，
文部科学省。

分析教科書

中村敬他（1978）THE NEW CROWN ENGLISH SERIES 1，三省堂。
森住衛他（2002）NEW CROWN ENGLISH SERIES 1，三省堂。
アレン玉井光江他（2020）NEW HORIZON Elementary English Course 5，東京書籍。
萬谷隆一他（2020）Junior Sunshine 5，開隆堂。
吉田研作他（2020）JUNIOR TOTAL ENGLISH 1，学校図書。
酒井秀樹他（2020）CROWN Jr.，三省堂。
金森強他（2020）ONE WORLD Smiles 5，教育出版。
小泉仁他（2020）Here We Go! 5，光村図書。
影浦攻他（2020）Blue Sky elementary 5，啓林館。

参考ウェブサイト

iB4e, ‘Alphabet Writing Practice’, (URL: <https://www.ibefore3.com/officeclassroom/alphabet-tracing-sheets>, 2021 年 1 月 28 日閲覧)
正進社, 「エイゴラボ FONTS」, (URL: https://www.seishinsha.co.jp/book_c/detail.php?b=182,
2021 年 1 月 28 日閲覧)
字遊工房, 「JKHandwriting」, (URL: <http://www.jiyu-kobo.co.jp/library/jkhwf/>, 2021 年 1 月 28
日閲覧)
松井孝志, 「英語の手書き文字指導のために：フォント比較の着眼点」
(URL: <https://note.com/tmrowing/n/n5c0f4b6ebe51>, 2021 年 1 月 28 日閲覧)
National Handwriting Association, (URL: <https://nha-handwriting.org.uk/>, 2021 年 1 月 28 日閲覧)